様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２１７６６

研究課題名（和文）マダガスカルにおける中等教育拡大の再検討－就学から就業への移行に着目して－

研究課題名（英文）Reexamining the expansion of secondary education in Madagascar: the transition from school to work

研究代表者
澤村　信英（Sawamura, Nobuhide）

大阪大学・大学院人間科学研究科・教授

研究者番号：３０２９４５９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,900,000円

研究成果の概要（和文）：マダガスカル農村部を事例として、学校から仕事への移行（School to Work Transition: SWT）の面から、国際的な開発目標となっている中等教育拡大の妥当性を検討した。その結果、①学校と家族は、SWTに一定程度影響を与えているが、それは認知的な能力の向上では必ずしもない。②高いレベルの教育を受けたとしても、それによるSWTへの影響はさほど大きくない。③SWTにおいて学校教育の役割は相対的に小さく、家族農業を営む親の影響が大きい、ことが明らかになった。したがって、単に中等教育を拡充することは、伝統的に安定した農村部におけるSWTに対して、負の影響が懸念される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究が学校から仕事への移行（SWT）に対する教育システムの効率性が議論の中心であったのに対して、若者の職業に対する考え方を検討し、彼らが仕事への移行において、身近な環境である学校や家庭をどのように活用あるいはそこからいかなる影響を受けているか、当事者の視点から理解しようとする点で学術的な意義がある。このような結論は、従来のSWT研究の分析を個人から家族単位で行う重要性を示唆するものでもある。社会的には、中等教育の拡充が国際的な開発目標になっている中、固有の社会における個人を中心とした教育拡充の是非についての視点の重要性を示唆することができた。

研究成果の概要（英文）：Using rural Madagascar as a case study, we examined the relevance of expanding secondary education, an international development goal, in terms of School to Work Transition (SWT). The results showed that (1) school and family have some degree of influence on SWT, but expectation of schooling does not necessarily mean expecting an increase in cognitive skills. At a lower level, school is considered a place to learn to live in society. (2) Even if children receive a high level of education, its impact on SWT is limited, which often leads parents to restrict their children's education to a certain level. Moreover, (3) while the role of schooling in SWT is relatively small, the influence of parents in agricultural households is significant. Therefore, there is a concern that simply expanding secondary education may have a negative impact on SWT in traditionally stable agricultural societies.

研究分野：比較国際教育学

キーワード：国際開発学　学校から仕事への移行　中等教育　マダガスカル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

2015 年にあらたに設定された SDGs（持続可能な開発目標）において、教育分野の開発目標として、初等教育に加え、中等教育の普遍化が合意された。研究代表者が主なフィールドとしてきたケニアにおいて、中等学校への進学は、子どもや保護者にとって大きな希望である。その主な理由は、現金収入のある仕事に就き、家族の生活を安定させてほしいという切なる願いがある。しかしこの背景には、自然環境が変化し、社会の不安定さが子どもの学校教育へと向かわせている一面がある。多くの関係者は、これを教育への理解の高まりとポジティブに捉えてきたが、これには大きな疑問がある。中等教育を拡大することは、校舎の建設や教員給与の改善の改善など、国際的な援助に依存すれば、それほど難しいことではない。

その一方で、マダガスカルをみると教育熱がなく、したがって中等教育の就学率も低いままである。これは往々にしてネガティブに捉えられるが、農村部では家族経営的な農業が行われ、子どもは初等学校を終えると親の仕事の手伝いをしながら、必要な農業や生活のスキルを学んでいる。ケニアに比べると、明らかに中等教育の就学率は低いが、これは生業の農業などに従事しているためで、逆に就学から就業への移行がうまくいっているとも理解できる。したがって、中等教育の拡充は長期的には必要であるが、すべての国において一律、無償化し完全普及させようとする現在の国際的な流れには同調できない、という問題意識が本研究の根底にある。

２．研究の目的

アフリカ地域における最貧国の一つであるマダガスカルを事例として、就学（学校）から就業（仕事）への移行（トランジション）について、家庭状況、家族構成、ジェンダー、地域特性等を個別に照合しながら、国際的な潮流となっている中等教育拡大の妥当性を再検討することを目的とする。同国を対象とする理由は、一人当たり国民総所得（GNI）は 400 ドル（世界で 183/189 位、2016 年）の低所得国であり、かつ貧困人口の割合も大きいながら、初等教育就学率が高く、中等教育就学率が低い、そして若年層失業率は極めて低いという特徴からである。

就学率でいうと、マダガスカルでは、これまで教育費が無償でなかったにもかかわらず、親は子どもを少なくとも小学校まで通わせてきた。家庭は子どもの教育達成に大きな役割を果たすことも報告されている（Glick et al. 2011）。特に親は、子どもの職業選択に関する意思決定に影響を与えているといわれている（Elder & Koné 2014; Elder et al. 2015; Nascimento et al. 2017）。しかし、マダガスカルにおいて、家族が将来の就労に関連して子どもの教育をどのように考えているかは明らかになっていない。

３．研究の方法

(1)調査地

フィールドワークは、マダガスカル 23 県のうちの 1 つ、イタシ県の農村部で実施した。イタシ県は首都アンタナナリボに隣接する地域であり、基本的には米の生産を中心とした農業地域である。Andrianampiarivo（2017）は、イタシ県の農村部の世帯の特徴を、最貧困層から最富裕層まで以下のように分類している。最も貧困な層から、(1）脆弱で農業を多角化する世帯、(2）熟練で、混作をしている農家、(3）学歴のない伝統的な稲作農家、(4）学歴のある畜産農家、非農業自営業者、労働者である。

(2)方法と対象者

ミアリナリボ郡の農村地域から 1 つのフクンタニを選び、意図的に選んだ 7 世帯 21 名の対象者に半構造化インタビューを実施した。選択基準の 1 つは、現在学校に通っている子どもがいる世帯であることである。富裕層と貧困層を区別できるように、経済活動や背景が異なる世帯を選ぶように配慮した。各世帯から、少なくとも子ども 1 名と親 1 名に個別にインタビューを行い、個人的な背景を聞いた上で、教育や仕事に関する考え方、選択、決定について調査した。

４．研究成果

(1)結果―農村世帯の社会的背景と意思決定

・<u>世帯の特徴と学校教育の選択</u>

マダガスカルでは対象者の収入を尋ねることが難しいため、経済活動をもとに対象者を分類した。富裕世帯とは、親が農業を含む大きな収入源と考えられる仕事に従事する世帯と定義した。土地の所有状況についても検討したが、富裕世帯では、広い土地を持っているものの、経済的に貧しい世帯から、土地を借りていることがわかった。つまり、マダガスカルの農村では、土地の価値は高いが、土地の所有者は必ずしも富裕層ではない。この地域の調査では、農業以外の仕事に従事する余裕のある貧困世帯の多くは、父親が定期的に一定期間、村を離れて働いていることが多い。農業以外の仕事を持っているからといって、必ずしも他の人よりも良い生活をしているとは限らない。

・<u>子どもの職業志望のあり方</u>

子どもの志望は、年齢や学年とともに成熟していく。2 名は夢を持っているが、将来何をするか決める年齢（11 歳と 12 歳）と学年（小学校 1 年）にはまだ達していない。教師になりたいと

言う者もいるが、両親によるとそれは良くない考えである。芸術家になりたいと言っている者もいるが、彼女の母親はそれに反対していない。しかし、両親は、これらは単なる夢であり、いずれは変わるだろうと思っている。他の対象者の考え方を振り返ってみると、このような夢は環境や情報に従って時間とともに変化していることが明確になった。子どもに情報を提供しているのは主に親だった。

・教育・仕事に関する家庭の捉え方

親、特に貧困世帯の母親は、仕事に就くという点では教育にそれほど期待をしていない。彼らにとっての教育とは、計算や読み書きといった基本的なスキル、道徳的・宗教的価値観を身につけ、「教養のある人」になるためであり、必ずしもディーセント・ワークに就くことを意味するものではない。裕福な世帯の親のほとんどは、前期中等教育のレベルになってから教育と就職の関係をみているが、資格の有無にかかわらず、子どもが就職するためのネットワークが最も重要だと考えている。

・子どもの選択に対する親の柔軟性

子どもが低学年のうちは、柔軟に対応する親が多かった。予算内であれば学校は子どもに選択させる親もいる。仕事の志望についても自由にさせている。しかし、学歴が高くなるにつれて、親の考え方は大きく変化する。家庭内での意思決定に関する聞き取りに基づき、対象者が柔軟な親なのか権威主義的な親なのか二つに分類した。

(2) 考察―家族を中心に将来を考える

・教育の重要性を再認識する

最近の政策では、政府は、たとえ初期段階の教育であっても、子どもたちにディーセント・ワークにつくための実用的なスキルを与えることができると提案している。しかし、家庭レベルでは、親は、初等・前期中等教育は基本的なスキルを身につけ、価値観を身につけるという目的を達成するものであると信じている。親は子どもが教育を受けられるように最善を尽くしている。仕事を与えることが政府の責任と考えられている他の国とは異なり（Tafere & Chuta 2020）、マダガスカルの農村では、親が子どもの SWT に貢献しようとし、個人と家族の努力が重要視される。

マダガスカルでは、積極的ではないが、中等教育の拡大は行われている。国がより高い段階の教育へのアクセス向上を推進するにつれて、人々は中等教育以上の教育を受けることが収入面での生活向上につながると期待するようになると考えられる。親の教育レベルが高くても、高校以上の教育の価値を認めない親もいるため、中等教育の積極的な拡充を有効に実施するために政府はそのための追加費用を世帯に説明する必要があると考えられる。

・個人より家族を優先する

すべてのインタビューにおいて、家族が中心になり、親は家族の地位、義務、または近さを強調した。選択・選択者に関わらず、マダガスカルの農村では、人々は自分のために将来を選ぶことはできず、むしろ家族のために選ぶということであり、最近の研究で多くの若者が家族のために必要だから働いているということが説明できる（Elder et al. 2015）。特に親が家族への義務について話す場合、子どもは必ずしも無理強いされて、やるわけではない。一方で、親に従う理由が単に家族の地位を維持するためである場合、若者は親の決定に反抗するようである。

一部の親、特に母親にとっては、家族の近さが最も重要である。彼らは一緒に過ごす時間を大切にする。農村部の家族形態を見ると、貧困層の家庭の男性は外で働き、時には長期間にわたって帰らない。女性は子どもと一緒に家にとどまる。家族で一緒にいる余裕があるのは、裕福な家庭である。西洋の考え方では、子どもは成人したら親元を離れなければならない。マダガスカル社会では、何歳でも結婚したときに初めて独立する。女性も男性も親の家を出て、自分たちの家庭を持つことになる。親は息子や娘に遺産を平等に残すことができるが、長男がいる場合は、娘（長女）は二番手になりやすい。

・親が介入する

教育の価値が認識されているため、世帯が貧困層でも、親はできる限り教育機会を提供しようとする。貧困層の人は主に親と一緒に仕事することによって、仕事をするスキルを得る。経済的に余裕のある人は民間のノンフォーマル教育でスキルを獲得する。公教育から仕事に関連する成果を期待することはほとんどなかったからだと考えられる。

親がある領域に親族などのネットワークを持っている場合、それを利用して子どもを仕事に就かせる。家族の地位、義務、結束が、子どもの SWT に貢献する親の行動の原動力になっている。高学歴の親でさえ、仕事よりも家族の結束を重視することがあり、それは人手不足のためではなく、社会にとってより必要性が高いと彼らが考えることを表している可能性がある。また、卒業後の失業など、より広いシステム的な問題を理解することで、親がそのような戦略を選択したという可能性はあるが、これは今後の課題にする。

〈引用文献〉

F・R・アンドリアリニアイナ、A・R・ラスルナイヴ、園山大祐（2023）「マダガスカル農村部における学校から仕事への移行―社会経済的地位による家族の意思決定に着目して」澤村信英、小川未空、坂上勝基編『SDGs 時代にみる教育の普遍化と格差―各国の事例と国際比較から読み解く』明石書店、87-108 頁.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Andriariniaina, Fanantenana Rianasoa & Sawamura, Nobuhide	４．巻 30(2)
２．論文標題 Investigating School to Work Transition in Rural Madagascar: Upper Secondary School Students' Career Plans and Their Decision Patterns	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of International Development Studies	６．最初と最後の頁 113-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.30.2_113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Andriariniaina, Fanantenana Rianasoa	４．巻 6
２．論文標題 Parental Involvement in School to Work Transition in Rural Madagascar: Focusing on Parents' Expectations of Education Outcomes	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Kyosei Studies	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Andriariniaina, Fanantenana Rianasoa, Harinosy Ratompomalala & Nobuhide Sawamura	４．巻 12
２．論文標題 Exploring the Changes Brought by Emergency Distance Education in Malagasy Universities: Disparities Under COVID-19 at a Teacher Training Institution	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Africa Educational Research Journal	６．最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50919/africaeducation.12.0_85	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 園山 大祐、ファナンテナナ リアナスア アンドリアリニアイナ、アンドリアマナシナ ルズニアイナ ラスルナイヴ	４．巻 29
２．論文標題 マダガスカルの教育政策の変遷と格差是正―職業へのアクセスに着目して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際開発研究	６．最初と最後の頁 75～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.29.2_75	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina, Nobuhuide Sawamura
2．発表標題 The Role of the Local Community in School Management in Central Madagascar: Reflecting on Decentralization and Participation
3．学会等名 31st Conference of Japan Society for Africa Educational Research, Kobe University
4．発表年 2022年

1．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
2．発表標題 Preparing for School to Work Transition under Secondary Education Expansion in Low-Income Areas in Kenya: Final Year Students’ Work Aspirations and Parental Involvement.
3．学会等名 30th Conference of Japan Society for Africa Educational Research, Kagoshima Women’s College
4．発表年 2022年

1．発表者名 Andriariniaina, Fanantenana Rianasoa
2．発表標題 School to Work Transition in the Rural Area of Madagascar: Comparing Students’ Aspirations and Parents’ Perspectives
3．学会等名 27th Japan Society for Africa Educational Research Conference, Osaka University (Virtual)
4．発表年 2021年

1．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
2．発表標題 School to Work Transition in the Rural Area of Madagascar: Confronting Children’s Aspirations with Parental Decisions
3．学会等名 58th Japan Association for African Studies Annual Conference, Hiroshima City University (Virtual)
4．発表年 2021年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 School to Work Transition in Rural Madagascar: Exploring Parents’ Influence on Children’s Aspirations
３．学会等名 22nd Japan Society for International Development Spring Conference, Bunkyo University (Virtual)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 School to Work Transition in Rural Madagascar: Investigating Parents’ Contribution to Children’s Career Plans
３．学会等名 12th Biennial Conference of Comparative Education Society of Asia, Kathmandu University (Virtual)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 Understanding Decision Making in School to Work Transition in Rural Madagascar: A Focus on Children’s Aspirations and Parents’ Views
３．学会等名 UKFIET International Conference on Education and Development, Oxford University (Virtual)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ファナンテナナ　リアナスア　アンドリアリニアイナ
２．発表標題 マダガスカル農村部における学校から仕事への移行―子どもの職業志望と親の影響に着目して―
３．学会等名 第62回アジア教育研究会、京都大学（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina, Nobuhide Sawamura
２．発表標題 School to work transition in the rural area of Madagascar: exploring the background to high school students job aspiration
３．学会等名 21st Spring Conference, Japan Society for International Development
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 School to work transition in the rural area of Madagascar: understanding the background to high school students' career plans
３．学会等名 26th Conference, Japan Society for Africa Educational Research
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 School to work transition in the rural area of Madagascar: exploring high school students' family background
３．学会等名 International Education Development Forum 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 Young people's career plan in school to work transition in rural Madagascar: investigating the background to high school students' decision patterns
３．学会等名 31st Annual Conference, Japan Society for International Development
４．発表年 2020年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina, Nobuhide Sawamura
２．発表標題 School to work in the rural area of Madagascar: upper secondary school children's aspiration in perspective of the new education policy
３．学会等名 国際開発学会第20回春季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Fanantenana Rianasoa Andriariniaina
２．発表標題 Preparing school to work transition in malagasy low-income areas: between personal aspirations and household initiatives
３．学会等名 国際開発学会／人間の安全保障学会2019共催大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 澤村信英、小川未空、坂上勝基（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 408
３．書名 SDGs時代にみる教育の普遍化と格差ー各国の事例と国際比較から読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	白川　千尋 (Shirakawa Chihiro) (60319994)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 (14401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	杉田　映理 (Sugita Elli) (20511322)	大阪大学・大学院人間科学研究科・教授 (14401)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	アンドリアリニアイナ　ファナンテナナ　リアナスア (Andriariniaina Fanantenana Rianasoa)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関